

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02516

研究課題名(和文) 枢密院顧問官フランシス・ウォルシンガムと詩人庇護に関する歴史的研究

研究課題名(英文) A Study in the Patronage of Sir Francis Walsingham

研究代表者

井出 新 (Ide, Arata)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：30193460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はイングランドの枢密院顧問官フランシス・ウォルシンガムの文人に対する庇護が1580年代においてどのような実態であったのかを具体的に明らかにした。ウォルシンガムが枢密院において果たしていた主導的な役割を検証した上で、彼のクライアントである詩人や劇作家にどのような恩恵を与え(逆に拘束を課し)たか、また、その庇護によってどのような社会的ネットワークがクライアントの間に構築されたか、という問題を、これまで殆ど顧みられることのなかった一次史料に基づいて考察した。それによって枢密院という政治家の集合体と詩人たちとの相互扶助的関係の全体像をおぼろげながら浮かび上がらせることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

枢密院顧問官としての特権を用いてウォルシンガムが庇護下にある詩人や劇作家にどのような恩恵を与え、また逆に拘束を課していたかという具体的な実態となると、史料の僅少さ故に殆ど解明されてこなかったというのが実情であるが、本研究では、トマス・ワトソンやクリストファー・マーロウという個別的な文人の事例を具体的に考察し、これまでパトロネージに関する史料として扱われてこなかった一次史料を丹念に掘り起こすことにより、枢密院庇護の実態に光を当て、それによって枢密院とクライアントとの相互信用に基づく継続的な関係性を再構築したことに、大きな学術的意義がある。

研究成果の概要(英文)： The provisions for military and cultural mobilization in the 1580s shared among the Privy Councillors, as well as Walsingham's clients' struggle to find the financial resources to proceed to the next stage of their career, attracted them to London to unite with those who made their living by associating themselves with mutually beneficial theatrical networks, and compelled them to be continuously sensitive to the cultural and political needs of the Privy Council. What this study discovers is the solidarity between those Privy Councillors' aspiring clients, who had common financial interests, shared underlying motives for political participation, and had similar literary orientations.

研究分野：英文学

キーワード：英文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 枢密院顧問官フランシス・ウォルシinghamに関する研究の嚆矢は、Conyers Read の古典的名著 *Mr Secretary Walsingham and the Policy of Queen Elizabeth* (1925) に遡る。Read は顧問官ウォルシinghamの動静を歴史史料から詳細に跡づけ、エリザベス女王の宮廷における政治的役割を克明に描いた。ただ、その庇護が当時の詩人や劇作家にどの程度及んだかについて Read は突っ込んだ議論を避け、その後ウォルシinghamと庇護に関する研究は殆どなされないままであった。一方で1980年代の新歴史主義擡頭により、詩人や劇作家のパトロネッジに関する研究が盛んになり、Guy Fitch Lytle 及び Stephen Orgel による代表的な研究 *Patronage in the Renaissance* (1981) から近年の Paul Whitfield White と Suzanne R. Westfall による *Shakespeare and Theatrical Patronage in Early Modern England* (2002) に至るまで、数多くの成果が発表された。とりわけ枢密院顧問官の庇護に関して言えば、White と Westfall による前掲書において、顧問官チャールズ・ハワードの演劇庇護について論じた Andrew Gurr の論文が目新しい。

(2) 顧問官ウォルシinghamについては、劇作家クリストファー・マーロウへの関心から、Charles Nicholl らがスパイ活動との関係においてウォルシinghamに注目したが、枢密院顧問官としての特権を用いてウォルシinghamが庇護下にある詩人や劇作家にどのような恩恵を与え、また逆に拘束を課していたかという具体的な実態となると、史料の僅少さ故に殆ど解明されてこなかったというのが実情だった。Gurr の論文でさえも、ロンドンにおける商業劇団の庇護や統制の記録からハワードの庇護方針を類推するだけにとどまっていた。

(3) そこで本研究が目指したのは、全体的な輪郭の把握ではなく、むしろ個別的な事例を具体的に考察することである。つまり、これまでパトロネッジに関する史料として扱われてこなかった一次史料を丹念に掘り起こしながら、枢密院の庇護という角度からその史料を再検討し、枢密院庇護の実態に光を当てる史料として読み直すこと、またそれによって枢密院とクライアントとの相互信用に基づく継続的な関係性を再構築することである。勿論、庇護の有り様は流動的かつ個別的であり、史料から再構築された一つの事例をもって枢密院のパトロネッジ制度全体を論じることは極めて難しい。しかし個別の事例研究を疎かにすれば、詳細な枢密院パトロネッジの実態を解明することは困難である。したがって本研究では、一つ一つの事例の積み重ねにより、枢密院顧問官と詩人との関係性の多様なあり方を浮かび上がらせるという手法を採ることとなった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、16世紀イングランドの枢密院顧問官フランシス・ウォルシinghamの庇護を具体的に明らかにすることである。具体的には、

(1) ウォルシinghamが枢密院において果たしていた主導的な役割を検証した上で、詩人や劇作家にどのような恩恵を与え(逆に拘束を課し)たか、

(2) その庇護によってどのような社会的ネットワークがクライアントの間に構築されたか、

という問題を、これまで殆ど顧みられることのなかった一次史料に基づいて考察することである。こうした事例研究を枢密院メンバーについて積み重ねることにより、枢密院という集合体と詩人たちの相互扶助的關係の全体像を浮かび上がらせることが究極的な構想である。

## 3. 研究の方法

主に以下の三つの側面から研究を展開してきた。すなわち

- (1) ウォルシングムの庇護の対象となった詩人・劇作家の作品分析
- (2) ウォルシングムや詩人の庇護関係に直接関連する一次史料の調査・分析
- (3) 庇護関係のコンテクストに関する一次史料及び二次史料の調査・分析

である。

(1)については、詩人トマス・ワトソンがウォルシングムの死後出版した追悼詩集 *Meliboeus* (1590)を読み解くことによって、庇護関係がどのような形で文学作品に反映されるかについて分析を試みた。この詩集がウォルシングム遺族の一人であるトマス・ウォルシングムに献呈されているところから、いつ頃ワトソンがウォルシングム一族の庇護を受けはじめ、どのようなネットワークを構築したかを、*Meliboeus* に登場する登場人物の関係から読み解いていった。またワトソンの *Hecatompattia* (1582)とトマス・ウォルシングムに献呈されたクリストファー・マーロウの *Hero and Leander* (1598)を読み解き、ウォルシングムやその一族に対して、どのような称揚を行っていたかを分析した。

(2)については、本研究の目的と直接的にかかわってくるところであり、古文書に埋もれている一次史料から庇護関係の事例を丁寧に再構築することで、従来想定されてきた庇護関係の見直しを迫り、或いは新しい庇護関係の想定を提案する方法論をとった。実際にケンブリッジ大学古文書館、コーパス・クリスティ学寮古文書館、ノーフォーク・レコード・オフィスなどへ赴いて、ウォルシングム関係の史料調査を行った。特に、ウォルシングムが文人クライアントを支援・育成する具体的な史料は、パーカー・ライブラリーに存在するロバート・ノーゲイト学寮長が記録していた帳簿を丹念に調べ、落ち穂拾いのような作業を繰り返していく他はない。幸い、ウォルシングムが介入した教員斡旋をめぐる訴訟、或いはウォルシングム批判のパラッドを作成した学生の処分など、いくつかの手懸かりは残されていたため、パーカー・ライブラリー所蔵のコーパス・クリスティ学寮古文書を中心に調査を行い、ウォルシングムが学寮長ノーゲイトと結んでいた庇護関係、そしてそれを通して広がった学生や教員への人脈ネットワークを再構築する方法をとった。

(3)については、*Meliboeus* のコンテクストに関連した周辺的な一次史料や二次史料を収集し、読み進めた。またそれと同時にフランシス・ウォルシングムの人脈がどのような文化的な環境の中で形成されていったかを明らかにするため、政治史研究(とりわけ中央政府内部の具体的機能に関する二次史料)を参照した。*Meliboeus* に関する調査がある程度成果を収めた段階で、Christopher Marlowe 及び Thomas Watson らの詩人・劇作家と顧問官 Francis Walsingham との庇護関係に関する周辺的な一次史料と二次史料の収集・調査へと移行していき、それに伴って、エリザベス治世下における演劇史の文献を収集し、読み進めるといった作業も連動して行った。

#### 4. 研究成果

枢密院顧問官ウォルシングムが、ケンブリッジ大学のコーパス・クリスティ学寮に対して行った寄付やポスト斡旋の史料を時期限定的に調査した。具体的には、ウォルシングムがコーパス・クリスティ学寮の学生や教員に対して行っていた政治的・経済的支援の実態を、パーカー・ライブラリーに残されている学寮長ロバート・ノーゲイトの帳簿から跡づけることができた。それによって、パトロンの周囲に文人クライアント(特にジョン・ハリントン、ニコラス・フォント、クリストファー・マーロウ)が集結し、人脈ネットワークが形成され、それが継続的に維持されていく様子を比較的短い期間の調査と研究で明らかにすることが

できた。現在、その成果を英語論文数本に纏めているが、詩人の庇護に関して手薄であった個別の詳細な事例に光を当て、とりわけ権力中枢の枢密院顧問官ウォルシンガムと詩人・劇作家の事例に特化する点で、16世紀英文学研究の先端的な研究として位置づけられる。一次史料に窺える一つ一つの事例を積み上げることで、従来の文学研究者が着目してこなかった人脈ネットワークの広がりや継続性、或いは詩人の創作に対する影響力を検証し、庇護制度の有り様を浮き彫りにした点に大きな特色がある。さらに本研究は歴史的調査手法をその土台に据え、新しい一次史料の掘り起こしに大きな比重を置いているため、これまでの文学研究が明らかにできなかった庇護関係の実態に迫ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Arata IDE	4. 巻 113-2
2. 論文標題 'Defamed by those that are ignorant in th'affaires': Reading the Privy Council Document on the Rumor about Christopher Marlowe	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 56-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 井出新
2. 発表標題 書簡は語 / 騙る 初期近代ジャーナリズムにおけるフィクションの誕生
3. 学会等名 日本英文学会・全国大会・シンポジア第一部門・初期近代文学空間としての書簡
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考